

編さん過程と編集後記

戦前における 苦小牧がいわゆる市町村史を編さんしようとしたのは大正七年一月で、この時町は、小保方卯市、編さん事業 田中正太郎などを「郷土史編纂事項調査委員」として、その調査、編さんを進め、『苦小牧郷土誌』を編集して、北海道博覧会に出品したといわれる。だが、これは極めて短時間にまとめた沿革および地誌の概略にすぎないものであったが、残念ながらこれは現存していない。

その後、本格的な町史を望む声があつて、幾多の経緯をへた後、大正十四年に当時苦小牧東小学校で熱心に郷土史研究を進めていた田中正太郎校長に執筆を依頼し、編さん事業に入ったが、本町は大正十年の大火でほとんどの資料（史）料を失い、編さんは困難をきわめ遅れに遅れていたが、八巻耕三町長を迎えてから紀元二千六百年記念事業として発刊することが決まり、このころから同僚酒井仁之進が加わり、実際の編さんは酒井訓導があたり、同十五年五月に四八八ページの『苦小牧町史』の発刊となった。

しかし、編さんを急いだため、年表を除いて大正期をもつて稿を終えたのは誠に残念であつた。

市史の編

戦後を迎え文化団体や公民館、図書館が発足し、おのずと苦小牧の歴史に対する関心も高まっていた。

さん過程

しかし、本市には戦前に発刊された『苦小牧町史』が唯一の歴史書であり、しかもこれは大正期をもつて稿を終えているため、市民各層から市史発刊に対する要望が高まったのである。

こうした中で、苫小牧郷土文化研究会や郷土史研究者において調査研究が進められていたが、昭和三十八年になって苫小牧市は新しい市史を発刊することを決め、同年二月十四日には小山清前学芸大学教授を執筆者として依頼した。さらに、同年三月四日には「苫小牧市史編さん規程」を公布し、二十日には森田勇教育長を室長とする一〇名の市史編さん室職員（全員兼務）の発令があった。

昭和四十四年二月には市史編さん委員、顧問の委嘱、任命があり本格的に編さんが進められることになった。

しかしながら、執筆者が健康をそこなうなどから思うような進展がなく、市史の発刊予定も二転、三転し、ずるずるとのびることになった。そして、昭和四十六年七月五日には小山執筆者は健康上の理由から辞任され、苫小牧市史はふり出しに戻ることになったのである。

昭和四十六年七月二十二日、新しい編さんスタッフとして編集長に堀江敏夫、編さんに佐藤一夫、扇谷昌康、調査員に近江謙三、金田隆一、中居正雄、多田犬一、神田正五（四十九年四月編さん員）、相武弘、同四十七年には菊池新一、畑宮清一郎を加えてスタートした。

その後は上巻あとがきに記したとおりであり、昭和四十八年に開基百年記念誌『目でみる苫小牧の百年』を発刊した。また、同四十九年には『苫小牧市史上巻』を発刊し、今回の下巻をもって通史の部は完了し、今後は同五十二年三月までに資料編として文献集と、図版・絵図・写真集の二冊を出して市史編さん事業は終了することになっている。また、編さん機関誌として、昭和四十六年から『機関誌苫小牧市史編さん』を発行してきたが、現在まで本誌九巻、別冊四巻の計一三巻を発行し、今後も本誌、別冊各一卷を発刊することになっている。

市史編さん委員会 苫小牧市史編さん規定に基づき、市史編さんに関する意見を求めるべく、市史編さん委員会が設置されたが、学識経験者、市の職員より選出の委員についてはこれまで変化はないが、議会選出委員につい

てはたびたび変更があった。

苦小牧市史編さん委員一覽

区 別	氏 名	就 任 年 月 日	退 任 年 月 日	備 考
学識経験者	門脇松次郎	昭和 四四・二・二八	昭和 ・ ・	苦小牧郷土文化研究会長
〃	藤田 隆一	四四・二・二八	・ ・	苦小牧商工会議所顧問
議会選出	高野 丈夫	四四・二・二八	四六・四・二四	
〃	木村寿治郎	四四・二・二八	四四・五・二五	
市の職員	新岡 正敏	四四・二・二八	・ ・	市助役
〃	工藤 勇二	四四・二・二八	・ ・	市教育長
議会選出	山口 昭和	四四・五・二六	四六・四・二四	
〃	森田 勇	四六・八・二〇	四八・八・一九	
〃	藤瀬 愿	四六・八・二〇	五〇・四・二七	
〃	望月 昭七	四八・八・二〇	五〇・四・二七	
〃	青野 春夫	五〇・五・二七	・ ・	
〃	笹谷 博	五〇・五・二七	・ ・	

※委員会発足前に議会選出の委員だけがあり、菊地善吾、合坪正三、中嶋義則が選出されていた。

市史下巻 苦小牧市史下巻の担当編さん員は第七編経済史、第八編社会・文化史、第九編交通・通信史、第一〇編公安・災害史、第一一編港湾・建設史を堀江敏夫編集長、付編部落史を神田正五編さん員があたり、第八編および付編において調査員による部分執筆をうけたが、これらの中には担当編さん員、編集長において削除、補足執筆した部分があった。なお、各執筆者は次のとおりである。

苦小牧市史下巻 執筆者一覧

編 名	章 節 名	執 筆 者	備 考
第七編 経済史	商業と経済の変遷 金融機関の発達	編集長 堀江 敏夫 堀江 敏夫	苦小牧市市史編さん係長
第八編 社会 ・文化史	教育と文化 社会と宗教 宗 教 衛生と医療	堀江 敏夫 堀江 敏夫 金田 隆一 堀江 敏夫	苦小牧工業高等専門学校教授
第九編 交通 ・通信史	交 通 通 信	堀江 敏夫 堀江 敏夫	
第一〇編 公安 ・災害史	公 安 災 害	堀江 敏夫 堀江 敏夫	
第一一編	苦小牧港と勇払原野	堀江 敏夫	

港湾 ・建設史	都市計画と土地造成 公営企業の変遷	堀江 敏夫 堀江 敏夫	
付 編 部 落 史			
勇 弘 樽 前 錦 岡 (覚生) 糸 井 弁 天 静 川 柏 原 植 苗 (美々) 沼ノ端 丸 山	調査員 近江 謙三 近江 謙三 調査員 畑宮清一郎 畑宮清一郎 編さん員 堀江 敏夫 堀江 敏夫 堀江 敏夫 調査員 畑宮清一郎 畑宮清一郎 調査員 多田 犬一 多田 犬一 神田 正五 神田 正五	前苦小牧市立清水小学校長 北海道教育委員会指導主事 苦小牧郵便局貯金課 苦小牧市立光洋中学校教諭	

なお、当初の計画では下巻に年表を加える計画であったが、ボリュームがあるため、利用しにくいなどの理由から、これを資料編印刷時に別冊にして発行することにした。

編集集 昭和三十八年三月二十日、市史編さん室が発足し、私は「苦小牧市史編さん室員を委嘱する」との辞令後記 を田中正太郎市長（苦小牧町史主任編さん員）から受けたが、これは私が市史に対する知識や能力があるのではなく、図書館に勤めていてここに編さん室が置かれることになったためであった。だが、翌三十九年には市史編さん執行態勢計画案が廃案となり、私は何の市史編さん用務もしなかったのである。

しかし、この仕事が私について回るといえるのか、昭和四十五年十一月四日には市史編さん係長、翌年七月二十二日に

は苦小牧市史編集長を命ぜられ、自ら編さんすることになってしまった。

私は歴史が好きではあったが、本格的な勉強もしたことがなく、いわばずぶの素人であったから、はじめのうちは苦労も多かった。ただがむしやりにやる以外にはなく、情熱だけがささえてあった。そして、時間が過ぎるにつれ、自分に一番欠けているものが歴史ごろとでもいうか、そうした自分自身の内面からにじみ出るものがないことに悩んだりもしたものであった。しかし、今となってみればこの種の悩みも楽しい思い出となったようだ。

苦小牧市史下巻は、ほとんどが私の執筆であつたため一年中多忙をきわめ、ほとんど季節感といったものを覚えないうちに過ぎ去つたような気がしてならないのである。それだけに編さん委員、編さん員、調査員の方がたにご迷惑をおかけしたものと思う。特に、連日夜業となつて校正にあたつた相武弘嘱託（調査員）には深く感謝するものである。

ともあれ、通史の執筆を終えた時は、ほんとうにほつとした。この間多くの人たちからご支援とご協力、そしてご指導とご助言をうけたが、とりわけ本市史監修者である高倉新一郎先生には終始ご迷惑をおかけし、写真については一方的な借用願ひに対しても心よく提供下さつた志方写真工芸社の志方孝之社長、また、編さん委員のみなさんには貴重なご意見やいろいろとお世話をいただき、さらに資料の提供をうけた関係各位、関係機関に対し深く感謝申し上げます、編集後記とする次第である。

昭和五十一年三月

苦小牧市史編集長 堀江敏夫

苫小牧市史

下卷

昭和五十一年三月三十一日発行

編集
発行

苫小牧市

監修

北海学園大学学長

高倉新一郎

印刷

株式会社 須田製版

